

---

# イストワール

m e y u u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イストワール

### 【Nコード】

N3444I

### 【作者名】

meyuu

### 【あらすじ】

突然の両親の死。

高校を中退し、ホストへなった優羽。

そこで出会った先輩ハル。

運命の女性との出会い。

優羽の数年間の物語。

## 優羽く美人な百合

ソファで寝ていた優羽は目を覚ました。

時計を見たゆうはびっくりして飛び起きた。

もう、昼の11時近かった。少しだけ寝ようと思ったのに、ずいぶん眠ってしまった。

優羽もだいたい疲れていたようだ。

優羽は寝室へハルの様子を見に行った。

おでこに乗せたタオルが落ちていた。

ハルはまだ寝ていた。

ハルの顔を見ると、昨日よりはだいたい楽そうだが、まだ顔が赤く、熱っぽかった。

優羽はボールの水を交換しようと、寝室を出ようとした時にハルが寝言で「百合．．．」とゆうのを聞いた。

新しく取り替えた水にタオルを浸し、きつく絞ってハルのおでこに乗せた。その時、ハルが目を覚ました。

「あれ？優羽？ずっといてくれたのか？」

「気分はどうですか？」ハルが目覚めたので優羽は安心した。

「ん？あゝ、なんか頭いてえな。でも、さっきよりはすげえ楽になった」起きあがりながらハルは言った。声が少しかかれていた。

「ありがとな」とハルは優羽に言った。

「ハルさん、まだ熱はあるみたいなので、今日の仕事は俺に任せてゆっくり休んで下さい。」

もっと、ハルに頼ってもらいたい優羽が言った。

「ああ、そうするよ。頼んだぞ」と後輩が自分の為になんばろうとしている姿を見て嬉しくなってしまったハル。

「何か食べ物買ってきましようか？」優羽は聞いた。

「いや、居らねえ。」

食欲がない様子のハル。

「じゃあ、栄養ドリンクなら飲めますか？」と聞き返す優羽。

「ああ…飲めるよ」ハルが答える。

「ちょっと待ってて下さい」優羽は寝室からでて、一番近いコンビニ二へ行った。

ウィーン。コンビニの自動ドアが開き、栄養ドリンクのコーナーに行き、何にしようか選んだ。

一番高くて、一番効果がありそうなのを二つ取った。

レジに持っていく、会計をした。

女性定員はチラチラ優羽の事を見ていた。かっこいいと思ってるようだ。

優羽はそれに気づかず会計を済ますと、コンビニを後にし、早足でハルのマンションへ戻った。

「ハルさん、これ飲んで下さい」優羽は栄養ドリンクを一つ渡し、もう一つはボールの横に置いた。

「サンキュウ」と言い、ハルは栄養ドリンクを飲み干した。

「急に客まかせて悪かったな」と謝るハル。

「いえ。」全然気にしてない様子の優羽。

「大丈夫だったか？」心配そうに聞くハル。

「はい。あの二人、ハルさんの事すごい気に入ってるみたいですね。ハルさんの話しかしなかつたです。」と報告する優羽。

「お前なあ、こうゆう時にこそ自分をもっと売り込め．．．あつ、いや、すげえ、助かつたよ。ありがとな」優羽にダメだしをしようとしたが、途中でやめた。

「それよりお前寝たか？」とハルが聞いた。

「はい、かなり。」と優羽が答える。

「そうか。俺はもう平気だから、お前ジム行ってこい」ハルが言った。

「はい…」

まだ優羽はハルの事が心配だった。

ホストは毎晩酒を飲むため、すぐに体重が増えてしまう。なので、昼は毎日ジムへ行ってカロリー消費をしているのだ。

優羽がホストをはじめた頃、仕事にまだ慣れてなく、疲れていたのもありジムに行かなかつた事があつた。その時、体重が3キロ増え、

それがハルにバレた時には、こっぴどく怒られた。

先輩の言った事を聞かなかった事と体重が増えてしまった事に反省した優羽はそれ以降、大切な用がない時は、毎日ジムに行っている。

「あつ、百合さんから電話がありましたよ」

優羽は百合から連絡があった事をハルに伝えた。

「そうか。昨日連絡しなかったからな。」とハルは少し寂しげな表情をした。

「あの、ハルさんと百合さんって付き合ってるんですか？」と唐突に聞く優羽。

「あ？付き合ってたねえよ。」ぶっきらぼうにハルが言った。

「ハルさんは百合さんの事が好きなんですか？」またまたストレートに聞く優羽。

「…まあな。」

「ふうくん、百合さん、綺麗ですもんね。」ニヤニヤしながら優羽が言った。

「ああ、綺麗だな」とハルもニヤニヤしながら言った。

「それじゃ、行きますね。また仕事終わった後寄ります。」と優羽は立ち上がり、部屋を出ようとした。

「ああ、じゃあな」

優羽は心配性だなあと思いつながらまたハルは眠りについた。

優羽は一度自宅に戻った。優羽の自宅はハルの家から車で20分ぐらいの所だった。

ハルのマンションまでとはいかないが、優羽も高級マンションに住んでいた。やはり、最上階。

一人で住むには広すぎるほどだった。

優羽は一人暮らし用のアパートで十分だったが、ハルがそんなびんぼつたらしい所に住むなよとこのマンションを紹介してくれた。

優羽はシャワーを浴びた。

二人は美男美女でお似合いだ。何で付き合っていないんだろう。ハルは以外と奥手なのか？ いやいや、絶対そんなはずはない。ハルは気に入った女性にはガンガンアプローチするだろう。そして、女を落とすテクニシャンだ。

優羽は、ハルと百合の事を考えていた。

シャワーを浴び終え、バスルームから出る優羽。支度をし、ジムへと向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3444i/>

---

イストワール

2010年10月28日05時09分発行